

ベートーヴェン：弦楽三重奏曲 ト長調 作品 9-1

ベートーヴェンが30歳の頃、初めての6つの弦楽四重奏曲（作品18の1～6）と交響曲第1番を完成させたことは、彼の作曲家人生において重要な節目でした。この創作に向けた準備は慎重に計画され、明確な目標が掲げられていたと考えられます。その過程で生まれたのが「弦楽三重奏曲 作品9」の作品群であり、1798年、彼が28歳の時に作曲されました。この3曲からなる弦楽三重奏のセット（作品9の1～3）は、彼と親交のあった支援者ブラウン伯爵に「これまでの最高傑作」との自負を込めて献呈されました。この作品は、演奏機会こそ多くないものの「初期の弦楽四重奏曲にもまさる」と高く評価されています。

特に作品9の弦楽三重奏曲は、後に生まれる弦楽四重奏曲の基礎となり、アンサンブルの妙や楽器の個性を引き出す手法が見事に活かされています。この三重奏曲において各楽器が対話的に響き合うことで、彼の後期四重奏曲に見られる「豊かな色彩感」を醸成する試みが既に始まっているのです。後期の四重奏曲が独創的な構造と深い表現力で音楽の到達点の一つとされるに至ったのも、初期に試行錯誤した三重奏曲が重要な試金石となっていることがわかります。

さて、後期に作曲されたベートーヴェンの弦楽四重奏曲は、現在も最も高く評価される至高の作品群であり、各楽器が個性を生かしながら響き合うことで豊かな色彩感を織りなし、聴く者を深い感動へと誘います。その表現の豊かさは驚異的であり、まさに音楽の到達点の一つと言えるでしょう。

ベートーヴェンは40代で聴覚を完全に失い、楽器を用いて音を確かめながら創作することが不可能になりました。それでも、彼は自らの内面にある音楽の鉱脈を深く掘り下げ、耳に頼らずとも自らの内に響きを確認する強い信念を持って創作を続けました。これが、彼の創作を支え続けた原動力であったと言えるでしょう。

一方で、彼がキャリア初期に手がけた弦楽作品は、楽器の可能性を丹念に探り、音楽の土壌を豊かに育む「創世記」の作品といえます。中でも作品9-1はその典型であり、明快で活力に満ちた楽曲です。この作品では、演奏者に高度なテクニックが求められるだけでなく、各楽器が独自の個性と表情を持ちながら互いに呼応し合い、音楽にさらなる深みをもたらされています。わずか3人の奏者による編成ながら、弦楽器のアンサンブルの美しさと豊かな響きが余すところなく引き出された、まさに珠玉の作品となっています。

解説 *SeetalClassics Tokyo* Maya Haneda